

受賞作品・作家と新聞記事に見る文学賞の動向 —本屋大賞・直木賞・芥川賞の比較を通じて—

田崎 裕美

文学賞の始まりについては諸説あるが、雑誌への投稿文を対象とした懸賞を前身とし、1926年に創設された日本文芸家協会の渡辺賞が嚆矢であるとする研究がある。1935年には、直木三十五賞（以下、直木賞）、芥川龍之介賞（以下、芥川賞）について、『文藝春秋』に「芥川・直木賞宣言」と両賞の規程が掲載された。戦時には中止となった文学賞もあったが、戦後には、それらの賞の再開や新たな文学賞の創設により、文学賞は増加する。1980年頃には小説や児童文学ジャンルの賞を中心とした大幅な増加が見られ、1990年前後には地方文学賞が相次いで創設され、「地方文学賞ブーム」とも言われた。本研究が芥川賞と直木賞と共に比較考察する本屋大賞の設立は2004年のことである。文学賞の発展については、1998年を頂点として文学賞の停滞・減少が指摘されることもあるが、全体の傾向を概観するには、実証的な研究はいまだ十分とは言えない。

2000年代以降の文学賞をめぐるのは、本屋大賞が創設されてから、YAHOO!JAPAN文学賞、青春文学大賞など、専ら小説に関係する作家などによる選考ではなく、一般読者、芸能人、書店員などが選考を行う「非作家選考」の文学賞の増加が指摘されている。この変化については多く批評で取り上げられ、その意味について多方面から考察がなされてきたが、現状を把握することを目的として、「非作家選考」の文学賞を主たる対象にして行われた計量的な調査は少ない。そこで本研究では芥川賞と直木賞、それに加えて新しく創設された本屋大賞の3つの文学賞の動向について計量的な調査を行い、それらを比較しながら文学賞の動向を考察することを目的としている。

本研究では、本屋大賞、芥川賞、直木賞の3つの文学賞を対象として、(1)それぞれの文学賞を受賞した作家や作品の傾向、(2)全国紙の記事における取り上げられ方について、計量的な調査を行った。なお、調査には、国立国会図書館オンライン（NDL ONLINE）、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の新聞記事データベース（「聞蔵Ⅱビジュアル」、「毎索」、「ヨミダス歴史館」）を使用して、作家や作品に関する情報、新聞記事を収集した。

受賞作家・受賞作品の傾向については、出版社との関係、作家の年齢や性別といった属性、初めて出版された作品から受賞までの期間など、3つの文学賞の相違が経年変化の観点も合わせて具体的に考察される。新聞記事の調査からは、本屋大賞と、芥川賞・直木賞とのあいだで関心の持たれ方に違いがあることが指摘される。前者では受賞作品のメディア展開やベストセラー入りに関心が持たれる一方、後者の2つの文学賞では、受賞作家によるコラムやインタビュー、新作の紹介などの記事が多い。数値と共に示されるこれらの結果は、計量的調査を踏まえたものであり、今後さらなる実証的な研究の必要性が示唆される。

（指導教員 原 淳之）